



2022年7月24日 説教「峻厳なる主の御手」

列王記第二 1章 9~18節

列王記第二から、エリヤとエリシャの生涯を学んでいきます。

1. 二つの五十人隊への主の御手 (9~12)

- ①五十人隊長と部下 (9) 「そこでアハズは五十人隊長の長を、その部下十人とともにエリヤのところに遣わした。彼がエリヤのところに上って行くと、そのとき、エリヤは山の頂にすわっていた。彼はエリヤに、『神の人よ。王のお告げです。降りて来てください。』と言った。」預言者エリヤは、アハズ王が病気の診断と予測について、エクロンの神であるバアル・ゼブブに伺いを立てたことについて、厳しい言葉を伝えていました。一方、アハズは使者から厳しい言葉を伝える人がいたことと、その姿や格好を聞いて、エリヤに相違ないと思いました。「あなたは必ず死ぬ」という言葉は、アハズにはショックだったことでしょう。そこで、アハズは早速、五十人隊長と部下をエリヤのもとに遣わしました。イスラエルには五十人隊、百人隊、千人隊がありました。イスラエルの軍では、戦うのは人間ではなく、神であるという考え方がありました。さて、エリヤは再びカルメル山にいたと考えられます。五十人隊長は王からの命を受け、「神の人よ。降りて来てください。」と願うのでした。
- ②天から火が (10) 「エリヤはその五十人隊長の長に言った。『もし、私が神の人であるなら、天から下って来て、あなたと、あなたの部下五十人を焼き尽くすであろう。』すると、天から火が下って来て、彼と、その部下五十人を焼き尽くした。」しかし、エリヤの対応は優しいものではありませんでした。「もし私が神の人であるならば」という言い方には、五十人隊長の姿勢は神に対するへりくだったものではなかったと想像できます。峻厳なる神への畏れがなかったと思われる。なんとその時、五十人隊長と部下は焼き尽くされたのです。
- ③第二の五十人隊長と部下 (11~12) 「王はまた、もうひとりの五十人隊長の長を、その部下五十人とともにエリヤのところに遣わした。彼はエリヤに答えて言った。『神の人よ。王がこう申しております。急いで降りて来てください。』エリヤは彼らに答えて言った。『もし、私が神の人であるなら、天から下って来て、あなたと、あなたの部下五十人を焼き尽くすだろう。』すると、天から神の火が下って来て、彼と、その部下五十人を焼き尽くした。」アハズはそれを聞いて、別の五十人隊長と部下を派遣しました。しかし、彼らの申し立ての姿勢も、王の態度を反映していて、傲慢さが滲み出ていたと思われる。その結果、彼らも天からの神の火で焼き尽くされてしまいました。

2. エキ (13~16)

- ①第三の五十人隊長と部下(13~14)「王はまた、第三の五十人隊長と、その部下五十人を遣わした。この三人目の五十人隊長は上って行き、エリヤの前にひざまずき、懇願して言った。『神の人よ。どうか私のいのちと、このあなたのしもべ五十人のいのちをお助けください。ご承知のように、天から火が下って来て、先のふたりの五十人隊長と、彼らの部下五十人ずつとを、焼き尽くしてしまいました。今、私のいのちはお助けください。』三回目に派遣された五十人隊長と部下は、エリヤの背後にある神の御力を想定し、敬意を払いました。そして、自分達の命を助けてくださいと必死に願いました。
- ②彼と一緒に(15)「主の使いがエリヤに、『彼といっしょに降りて行け。彼を恐れてはならない。』と云ったので、エリヤは立って、彼といっしょに王のところまで下って行き、」その時に、主の使いはエリヤに、五十人隊長と一緒に山を降り、彼を恐れてはならないと言いました。とういことはエリヤ自身、五十人隊長と部下達に何をされるかわからないという恐れがあったことがわかります。しかし、今や勇気を得て、アハズヤ王の所に下っていったのです。
- ③王への直言(16)「王に言った。『主はこう仰せられる。(あなたは使者たちをエクロンの神、バアル・ゼブブに伺いを立てにやったのは、イスラエルにみことばを伺う神がいないためか。それゆえ、あなたは、上ったその寝台から降りることはない。あなたは必ず死ぬ。)]』エリヤは王の前に出て直言します。つまり、アハズヤが病気になった時に、バアル・ゼブブに伺いを立てて、イスラエルの神の所に来なかったことを責めたのです。そして、妥協なく「あなたは死ぬ」と告げたのです。

3. アハズヤ王の死と後継者 (17~18 節)

- ①王の死(17)「王はエリヤに告げた主のことばのとおり死んだ。」アハズヤ王は死にました。それはエリヤを通して伝えられた峻厳なる主のことばの通りでした。
- ②ヨラムが王に(17)「そしてヨラムが代わって王となった。それはユダヤの王ヨシャパテの子ヨラムの第二年であった。アハズヤには男の子がなかったからである。」アハズヤの後を継いだのは、ヨラムでした。彼はアハブ王の子でした。アハズヤに男の子がいまませんでしたので、アハズヤの兄弟であるヨラムが王となったのです。南王国でいえば、ヨシャパテの子であるヨラムの時代でした。同名ですが、別人です。北王国の王ヨラムは父が築いたバアルの柱を除いたという美点がありました。
- ③アハズヤの業績(18)「アハズヤの行ったその他の業績、それはイスラエルの王たちの年代記の書に記されているのではないか。」死んだアハズヤ王の業績については、年代記の書に記されていると、ありま

すが、これは歴代誌のことではなく、列王記著者の手元にあった年代記の書であったと考えられます。

《結論》第二列王記は厳しい出来事で始まります。アハズヤ王が父アハブと母イゼベルのバアル信仰を受け継いでいたということは先週確認しました。イスラエルという国が、神から特別に恵みを受け、神への信仰を与えていただいていたことは、アハズヤもわかまっていた筈です。だからこそ、主はアハズヤが欄干から落ちて病気になった時に、エクロンの神、バアル・ゼブブに使いを行かせて、病状の伺いを立てたことについて、責めているのです。

預言者エリヤは、使いの者に、主からのメッセージを直言しました。これを語った人はエリヤだと直感したアハズヤは、五十人隊長と部下の者達を派遣しました。山から降りてきて、助けてもらいたいというところでしょうか。しかし、その姿勢は傲慢なものでした。来て当然だといった様子です。「神の人よ」と呼びかけさせていますが、イスラエルの神への敬意がありません。結果としては、五十人隊長と部下達は焼き尽くされてしまいました。これを受けて、第二弾として、別の五十人隊長と部下達が派遣されます。しかし、その姿勢に変化は見られず、彼らも焼き尽くされてしまいました。第三弾として、また別の五十人隊長と部下が送られました。彼はアハズヤに促されたのか自分でそのようにしたのかは不明ですが、謙虚に命乞いをします。主の使いが、「彼と一緒に降りて行け」という導きを得て、アハズヤ王の前に、面と向かってエリヤが直言した内容は、これまでと同じで厳しいものでした。「あなたは必ず死ぬ」というものでした。そして、アハズヤ王は告げられたように死を迎えたのです。

こうした記述を読むと、ある方は神はなぜここまで厳しいのだろうか、アハブの時は隣みがあったのにと思われるかもしれませんが。しかし、旧約聖書を読む時に、私たちはヒューマンイズムの観点からではなく、唯一のまことの神への信頼の観点から考えなければなりません。ヨシュア記において、神の聖絶がありました。つまり、約束の地に入っていく民が、その地の征服のために、その地の民を完全に滅ぼすということがありました。信仰の純粹性のためでもありました。聖絶という言葉はI列王 20:42 にも出ています。18章には、バアルの預言者達にも厳しいさばきがなされています。その時に民は「主こそ神です」(39 節)と告白しています。主への信仰の徹底は、エリヤの時代においても、最重要事項として継続されていたのです。そのためにもエリヤは預言者として立てられていたのです。

このような峻厳な神に接するとき、ある人はたじろぐ
かもしれません。しかし、どうでしょう。厳しい父（母）の戒めが
なければ、子どもは何が正しいことを学ぶことはできません。そ
れと同じように、旧約の時代の民は、義なる神に立ち返ることが、
どちらでも良いことではなく、必ずや告白され、実行することを学
ばなければならなかったのです。翻って、私共は新約時代に生きて
います。愛なる神を教えられています。その方は何でも赦してくだ
さるのだから、神から離れていても良いなどと、神を甘く見るこ
とは許されません。今こそ、主の前に悔い改めの心をもって出てい
きましょう。主ご自身もさまよう私たちを捜していてくださるの
ですから。